

5. 部品毎の検査

部品はその種類に関係なく、同一の操作で新規作成、テスト、修正が行えるようになっている。その操作画面が図-2である。

図-2

部品は、新規作成⇒テスト⇒修正⇒テスト⇒完成

↑ ⇐ ⇐ ⇐ ⇐ ⇐ ⇐ ↓

の順序で作成される。つまり、作成した部品は即テストを選択することにより検査・確認が行える。

6. 本物のエグゼキュタを使った検査

個々の部品単位でのコースウェアの検査が終わると、いくつかの部品が集まった単位での検査を行う必要がある。いくつかの部品を集めての検査の単位として、“フレーム”を選んだ。これは、エグゼキュタであるLEX (Learn up EXecuter) で実際に学習を進める上での最小の単位がフレームであることによる。

このフレーム単位での検査を、“コースウェアのテスト”と呼び、本物のエグゼキュタ：LEXをオーサリング：LASから起動し検査するようにした。この“コースウェアのテスト”時の選択画面が図-3である。

図-3

この、コースウェアのテストでは、音声教材を検査に使うのか否か、及び、学習記録を採取する検査を行うのか否かが指定できるようになっている。

7. 教材ディスク作成時の検査

LASでコースウェアの各部品の作成が終わり“コースウェアのテスト”による検査も終わるとコースウェアの完成形である教材ディスクを作成する。この時に最終的な検査を行う。個々の部品は既に検査済みであり、部品が集まった最小単位であるフレームでの検査も終わっている。ここでは不足している部品が無いかを検査する。不足がある時は、教材ディスクは作成しないことにしている。教材ディスクの作成のイメージを図-4で示す。

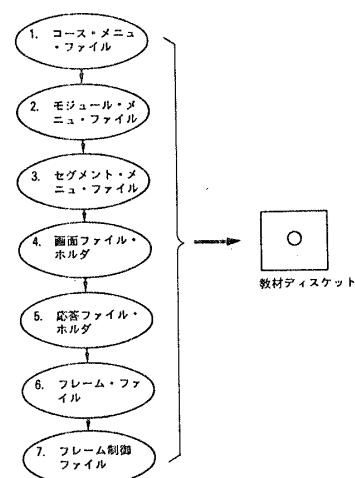


図-4

8. おわりに

コースウェアの信頼性向上の一助となればと、オーサリング：LASに検査機能を持たせた。実際にLASの開発が終わり、LASでコースウェアの作成ができるようになってみて、検査機能が予想外の効果をもたらしている。一つはLASのデモが検査機能を使うことで非常にアトラクティブになった（アニメーション等他の機能との相乗効果とは思うが）。もう一つは、検査機能を持ったLASがプレゼンテーションツールとして使えるということである。

まだ検査機能による効果がどうなのかを調査はしていない。しかし、コースウェア作成中のLAS使用者に精神的安心感を与えていることは確かである。

参考文献

- 1) 菅野文友：ソフトウェアの信頼性，日科技連
- 2) 日本ユニシス：教材作成システムLAS使用解説書